序　　文

本書は、2010年4月より2015年3月まで、5年間にわたって行われた京都大学人文科学研究所の共同研究班「現代中国文化の深層構造」（班長：石川禎浩）の研究成果報告論文集である。本研究班は、現代中国を形作る文化に潜む歴史要因を20世紀全般を視野にいれて解明しようとするものである。共同研究班の発足にあたり、この研究テーマの意図するところについて、班長のわたしはおおよそ次のように記した。

> 現代中国文化は、まさに百花繚乱の状態にある。かたや伝統的学術、すなわち「国学」の肯定的な見直しが進む中、世紀転換期を挟んで本格的に伝播したポストモダンの諸思潮も中国の知識界に大きな影響を与えている。民主化を求める声がインターネットを通じて伝播する一方、そのインターネット利用をめぐっては、様々な公的規制が加えられ、それがさらに内外の議論を呼ぶなど、現代中国の文化は、同国の経済面の繁栄と相まって、世界の注目を浴びている。
>
> だが、百花繚乱の如く見える現代文化は、芸術をとっても、思想をとっても、その中に歴史の刻印や記憶、そして政治との軋轢を内包していることを我々は知っている。歴史の刻印や記憶のいくつかは、例えば文化大革命や民主化運動弾圧のように、公的に巧みに封印されてはいるが、間違いなく文化の深層を形作っている。現代の中国文化が、歴史的にはどのように位置づけられるのかという問題に答えるには、例えば海外思潮の流入ひとつをとってみても、その歴史的経験（すなわち清末や五四新文化運動時期）との比較を踏まえなければならないであろう。本研究班は、こうした現代中国の文化の深層構造を、20世紀初頭から今日に到るおよそ100年を対象に、歴史学的手法によって解明しようとするものである。政治との関わりで言えば、新たなに形成されつつある現代中国文化は、旧来のイデオロギーと如何なる摩擦を抱えているのか、共産党型の政党文化は社会にどのように広まっていったのか、などの課題の解明が目指されるであろう。また、文化活動そのもので言えば、今日の芸術創作・思想潮流の多様化は、清末から民国時期の文化的カオスと類似の状況なのか、そしてそもそも中国という文明体系が近代以降の異文明との接触の中で、それへの接合をはかるということは世界史の上でどのような意味を持ったのか、これらがすべて俎上に載せられるであろう。

このねらいが果たしてどの程度達成されたかについては、本書に収める9篇の論文を読んで評価していただくよりほかない。この序文では、それら研究成果のもとになった研究班例会の現況について、報告しておくことにしたい。

現在人文科学研究所では、本研究班のほかに、村上衛准教授が班長をつとめる「近現代中国における社会経済制度の再編」共同研究班も、2012年4月の発足以来、隔週で例会を開催しており、本研究班の例会と合わせると、中国近現代史関連の研究例会が毎週開催されるという喜ばしい状況が続いている。本研究班「現代中国文化の深層構造」の例会は、基本的に隔週金曜の午後2～5時に人文研本館4階のセミナー室3で行われた。5年間計80回（報告数85）に及ぶ研究班例会は、いずれも中身の濃い研究報告と討議（通常、1回あたり1報告者が1～1.5時間の報告を行い、その後コメンテーターの論評に続いて討論）の連続であったと自負している。参加者の多さが必ずしも研究活動の充実を物語るものではないことを承知の上で、若干のデータを提示するならば、5年間80回の研究班例会の参加者は、延べで1,700人ほどに達する。単純に計算すれば、毎回の平均参加者数は21人強ということになる。この数字は、平日昼間に開催する研究活動としては、相当なものと見なければなるまい。言うまでもなく、近年の大学・研究機関をとりまく研究環境の厳しさと教員の多忙が一方にあり、他方で中国学のディシプリンが多様化し、それぞれの研究者の関心も拡散しているため、特定のテーマを掲げる研究会を平日に開催したのでは、およそ普通の大学教員が常時参加することなど不可能だからである。

ちなみに、人文科学研究所における中国近現代史関連の共同研究班は、1966年に発足した「辛亥革命の研究」の最初の5年ほどが土曜午前の開催であったのを除けば、テーマを変えつつも、1971年以来一貫して金曜午後に行われているが、毎回の参加者数はほぼ横ばいか、微増傾向かといったところである。一方、その内訳を見ると、1970–80年代は参加者の半数から2/3は大学の専任教員であったのに対し、現在ではその割合は1/3から1/4に下がっており、さらに京大以外の大学の専任教員となると10％からせいぜい15％である。つまりは、研究班例会の出席者の多くは、教員に代わって大学院生やポスト・ドクターといった若手によって占められているわけである。中国出身の留学生も近年は目に見えて増え、大学院生でいえば、日本人院生よりも多いのが現状である。

こうした研究班員内訳の変化は、当然に研究班例会のありようにも影響を及ぼす。すなわち、研究所の共同研究班と言っても、いわば大学の院ゼミのように、研究報告にたいして、研究する上での作法から用いるべき資料に至るまで、「指導」することが増えているということになるだろう。当然に、報告をする場合も、聞く側が必ずしも高度な専門知識を有する者ばかりではないということになるから、いきおい基礎的な前提知識を含めて、丁寧な説明をするようになる。こう書くと、研究や報告の水準が低くなっているように感じられるかも知れないが、実は必ずしも悪いことばかりでもない。人にわかってもらえる

報告をするよう心がけることで、ややもすればタコツボ化しがちな研究に、よい意味で歯止めがかかっているようにも思えるからである。とはいいながら、本研究班のような発表中心型の研究班は、会読型の研究班と違い、特定の文献や研究書を班員全員で精読し、思索を重ね、時に引用資料を対照するということが少なく、いわゆる調べものや研究の仕方がうまく共有・伝授されないという憾みがどうしてもつきまとう。そこで、2012年10月から1年半ほど、研究班例会のある日の午前に、班員の有志諸氏と中国近現代史にかんする日本語新刊書を読み、それについて感想・評価を述べ合うという一種の読書会をあわせて開催してみた。

この読書会（各回2時間、参加者毎回約10人）でとりあげたのは、小野信爾『青春群像　辛亥革命から五四運動へ』、ラナ・ミッター（吉澤誠一郎訳）『五四運動の残響』、石川禎浩・狹間直樹編『近代東アジアにおける翻訳概念の展開』、水羽信男『中国の愛国と民主――章乃器とその時代』、深町英夫『身体を躾ける政治――中国国民党の新生活運動』、笹川裕史『中華人民共和国誕生の社会史』、家近亮子『蔣介石の外交戦略と日中戦争』、丸川知雄『現代中国経済』、長堀祐造『魯迅とトロツキー』の計9冊である。多くの場合は著者をお招きして議論に加わってもらったが、時には具体的な文献の引用を指して、読み方がおかしいのではないか、その誤った読解から導き出される解釈も成り立たないのではないかと言った厳しい指摘がされることもあるほどで、真剣での渡り合いにも似た良い鍛錬の時間を持つことができた。招きに応じて上洛して下さった著者の方々には、心から御礼申し上げたい。本報告書に収められた論文の一部は、そうした経験の上に執筆されたものである。また、研究班の正規の研究例会とは別に、以下のように講演会を開催した。

2010年　連続講演会「現代中国――そのイメージ」（人文研アカデミーとの共催、9月30日、10月7、14、21日）講師：石川禎浩、中村史子、韓燕麗、小野寺史郎

2011年　講演会「証言と倫理――夾辺溝労働改造農場の回想」（7月8日）講師：セバスチャン・ヴェグ（Sebastian VEG）

2012年　特別講演会「現代中国とアメリカ・日本」（文学研究科現代史学専修との共催、3月28日）講師：牛大勇

2013年　講演会「“病夫”與“四萬萬”：近代中国的両項国族論述想像」（4月5日）講師：楊瑞松

2014年　特別講演会「文章と術語の比較研究――梁啓超「国家論」／吾妻『国家学』／平田等『国家論』」（10月5日）講師：狹間直樹

特別講演会「日本と中国における初期社会進化論――加藤弘之と厳復の場合」（11月21日）講師：高柳信夫

このほかに、いくつか業務報告的なことを附記すれば、この共同研究班は、2010年度に人文科学研究所東方学研究部の共同研究班（B班）として、当初4年の計画でスタートし、その後1年間C班として延長して活動を終えた。B班、C班は、人文研が全国共同利用・共同研究の「人文学諸領域の複合的共同研究国際拠点」として進める研究事業における研究班区分である。研究班の活動自体でいえば、BでもCでもほとんど変わりはないが、B班の場合は、班員（共同研究者）の公募が行われ、年間数十万円の研究予算がつくのに対し、C班はそれがほとんどない、いわば手弁当方式の研究班運営になるわけである。先にも記したが、大学・研究機関をとりまく状況が、研究にはどんどん不向きになる中、手弁当で研究班に参加して下さった班員の諸氏に、改めて感謝申し上げる。

また、本研究班は2010年度の発足より、人文研附属現代中国研究センターの主要な研究活動のひとつとして、人間文化研究機構（NIHU, 大学共同利用機関法人）と京都大学との連携研究事業（現代中国地域研究京都大学拠点）の一部として行われた。5年間の正規の研究例会での報告者と報告題目については、『東方学報』第86–89冊（2011–2014年）の彙報欄に掲載されているほか、人文科学研究所附属現代中国研究センターのウェブサイトの関連欄（http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~rcmcc/group107.htm）に掲げてあるので、ご覧いただきたい。研究班の運営にあたっては、現代中国研究センター客員准教授の袁広泉（2012年3月離任、現江蘇師範大学外国語学院副教授）、同じく武上真理子（2012年4月着任）、および同助教の小野寺史郎（2014年3月離任、現埼玉大学教養学部准教授）の三氏に補佐してもらい、例会準備に関しては、同センター受け入れの柴田陽一、望月直人（以上、産学官連携研究員）、森川裕貫、森岡優紀（以上、学振特別研究員）ら諸氏のサポートを受けた。

本書に収録した9篇の論文については、研究班メンバーの江田憲治、小野寺史郎、瀬辺啓子、高嶋航、武上真理子、丸田孝志、村上衛の各氏に、それぞれ専門分野に近い論文の査読をお願いした。また、武上氏には校正の最終チェックを担当していただいた。本書に収めるすべての論文については、本書の刊行後にそのPDF版をウェブサイト上（http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~rcmcc/seika.htm）に公開する予定である。本書の出版には、人間文化研究機構による地域研究推進事業（京都大学との共同事業「中国近現当代史の重層構造」）のプロジェクト経費を使用させていただいた。人文学の基礎研究にたいする同機構のこうした支援にたいし、あらためて厚く御礼申し上げるとともに、このプロジェクトが今後さらに息長く継続されるよう願ってやまない。

2015年3月24日

人文科学研究所附属現代中国研究センター
石　川　禎　浩